

こころの玉手箱

公明党代表

太田 昭宏

4

落選はつらい。国政に初挑戦した一九九〇年の衆院選で旧東京八区の次点に終わり、そんな気分を味わった。

「人事を尽くせば、結果はどうでもよい」

そういう言い方をする人もいる。自分との戦いであるスポーツや受験の場合はそうかもしれない。だが、選挙は多くの人々を巻き込み、その期待を背負って戦う。我が身を捨てて戦ってくださる熱心な支援者に支えられている私たちは、何が何でも勝たなくてはならない。

落選直後、選挙区内をお

いさつ回りに歩いた。あるとき、道ばたに立っていた一人の女性がこちらの顔をみるなり、いきなり泣き出した。

「私たちの力不足で国政の場に送り出せずに申し訳ありませんでした」。私は胸に熱いものがこみ上げてきて、言葉にならなかつた。

「申し訳ありません」と言うのがやっとだった。

九三年、旧東京九区で初当選。続く九六年と二〇〇〇年は比例代表に回って議席を得た。

特に厳しかったのが次の〇三年の選挙だった。党が東京で擁立するただ一人の小選挙区候補として



撮影は結構楽しかった

候補として挑むことになった。選挙区は北区と足立区の一部からなる東京12区。住まいを北区に移

七変化ポスター

当選目指し、なりふり構わず

した。

背水の陣で臨むため、国会対策委員長を辞め、新しい選挙区を自転車に乗り、

ひたすら回った。だが、なかなか知名度が上がらない。勤め人が多く、昼間は留守がちのお宅が多い。駅頭にも立ったが、なかなかじっくり話を聞いてもらえない。

知名度アップへの切り札として撮影したのが、この七変化ポスターだ。

「ふまじめに見えるのではないか」「笑いものになるのではないか」

党内にはいろいろな批判的な声があったが、なりふり構っている場合ではなかった。

街頭に張ると「あれは何だ」と反響を呼んだ。この起死回生の一手が間違いないく勝利への突破口になったと思う。ある大学ではポスターの影響力に関する研究材料になったりした。

ちなみに自分が一番気に入っているのは魚屋バージョンだ。

入っているのは魚屋バージョンだ。